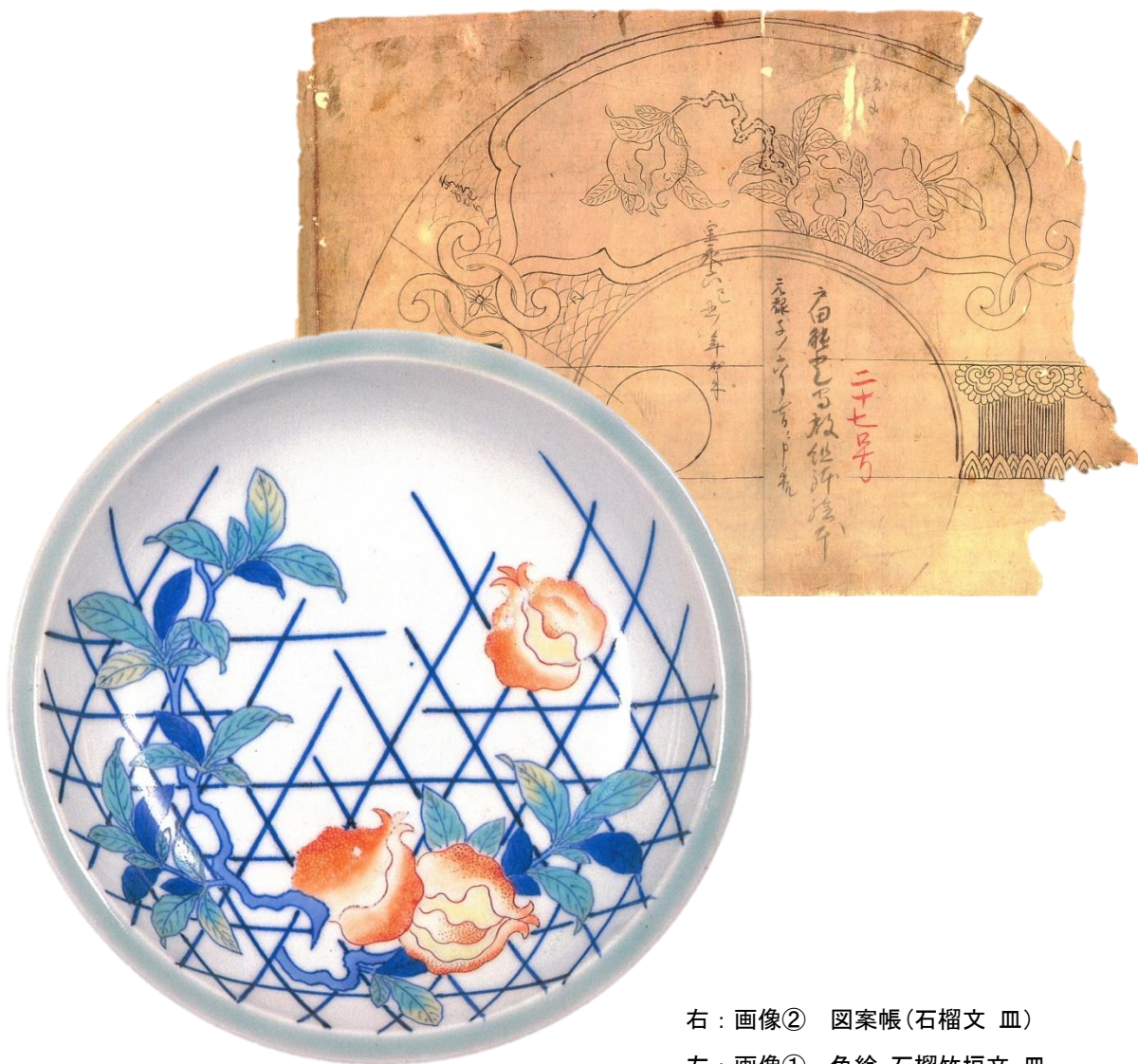




プレスリリース

# 鍋島焼と図案帳展

2014年1月7日（火）～3月30日（日）



右：画像② 図案帳(石榴文 皿)

左：画像① 色絵 石榴竹垣文 皿



TOGURI MUSEUM OF ART

戸栗美術館



## 広報用写真

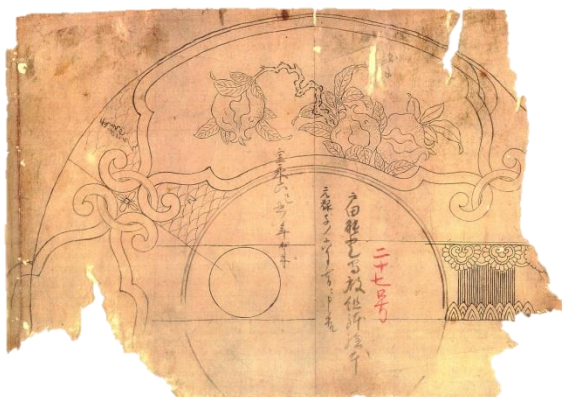
※以下の展示予定作品の写真データ等をご用意しております。ご掲載の際は注意事項をご覧の上、別紙写真借用申請書をお送り下さい。



画像①：色絵 石榴竹垣文 皿



画像③：色絵 椿文 皿



画像②：図案帳(石榴文 皿)



画像⑤：図案帳(桜樹文 皿・猪口 2種)



画像④：染付 桜樹文 皿

■（表紙）画像① **色絵 石榴竹垣文 皿** 鍋島

江戸時代（17世紀末～18世紀初）高 5.7 cm 口径 20.1 cm 高台径 9.8 cm

竹垣を地に配し、上に石榴の折枝をあらわすが、石榴の実には赤色の点彩と薄塗、さらに黄色を加えて描く。葉を染付と緑・黄の上絵で描くのは鍋島の絵付の常套である。鐺縁とした口縁に青磁釉を塗るが、これも絵付け全体の配色によく合って瀟洒な趣をだしている。裏面は三方に6箇の七宝を結んだ文様、高台は櫛目文である。

■（表紙）画像② **図案帳（石榴文 皿）**

元禄9年（1696）銘・宝永6年（1709）銘

見込を白抜きとし、周囲を三方に割った中に石榴を描いた図案。「色絵 石榴竹垣文 皿」と構図は異なるが、石榴の実や葉の描き方は類似。元禄9年に戸田能登守殿から注文を受けた事と、宝永6年に出来上がった事が記されている。その間13年のひらきがあるため、同製品の注文が2回あったと考えられている。

■画像③ **色絵 椿文 皿** 鍋島

江戸時代（17世紀末～18世紀初）高 5.9 cm 口径 20.3 cm 高台径 10.8 cm

鍋島焼では盛期から見られる、片側に文様を寄せ他方を余白として残す構図で画面に動きや広がりを生んでいる。盛期の作品らしく、写実的な樹幹の描写、花の濃淡の配色が素晴らしい。裏は三方に七宝結び文、高台は櫛目文をめぐらせている。

■画像④ **染付 桜樹文 皿** 鍋島

江戸時代（18世紀前半）高 5.3 cm 口径 20.0 cm 高台径 10.8 cm

桜の花をモチーフとした鍋島焼は多いが、これは桜の一樹全体を器面に押し込めている。木の根から枝の先まで描いた様子は木犀を描いた皿にも例がある。一見写生風だが、花がすべて正面を向いているところや、バランスの取れた余白などに意匠化がうかがえる。同図案の色絵作品が九州陶磁文化館に収蔵されている。

■画像⑤ **図案帳（桜樹文 皿・猪口2種）**

享保3年（1718）銘

左上下に瓢箪文、七宝繫文の猪口の図案。右半分には「染付 桜樹文 皿」と同様の図案を描く。左下に享保3年銘。

**以上を含む、約 80 点を展示予定。**





## 展覧会概要

江戸時代、諸大名にとって幕府への献上は参勤交代と同様の義務であり、将軍への忠誠を表わす重要な行事。鍋島家も献上品に事の外気を遣い、江戸時代初頭には中国から輸入した陶磁器などを献上していました。しかし、17世紀後半、中国の内乱の影響で陶磁器が入手困難となり、鍋島家はそれに代わる献上に相応しい新たなやきものとして、鍋島焼を創出します。藩内で培った伊万里焼の技術の粋を集めて生み出された鍋島焼は、17世紀末、大川内山（現伊万里市）に築かれた御道具山（藩の御用品を焼く窯）にて本格製造が開始されました。

鍋島家の記録や伝世品から、鍋島焼の形や文様、種類には一定の規格があったと考えられています。それを裏付けるように、鍋島家にはその形や意匠などを記した図案帳が伝わっています。

今展示では、献上品としての規格性に注目し、盛期の鍋島焼を中心に名品の数々を展示、あわせて図案帳もご紹介致します。



## 展示詳細

### ◆鍋島焼の規格性

鍋島焼は17世紀末から18世紀初頭に最盛期を迎え、最高水準の製品がつくられました。この頃の製品には以下のような規格性が見られます。

- ・皿の形…「木盃型」<sup>もくはいがた</sup>と呼ばれる、丸くて深い皿に高い高台がついた形
- ・皿の種類…尺皿（約30cm）・七寸皿（約21cm）・五寸皿（約15cm）・小皿（9～12cm）
- ・色数…ベースとなる染付の青、色絵の赤・緑・黄色の計4色に限定
- ・文様の描き方…染付の青または赤の輪郭線、その中を丁寧に塗り埋める描法が基本
- ・裏文様…染付で三方に七宝繫文などを配す、高台側面に櫛目文、高台内に目跡なし



画像③ 色絵 椿文 皿 鍋島

江戸時代（17世紀末～18世紀初）

高 5.9 cm 口径 20.3 cm 高台径 10.8 cm

鍋島家の「重茂公御年譜」(1760)には、例年献上の内、毎年11月に献上された「陶器(鍋島焼)」の内訳について「五箱(鉢二、大皿二十、皿二十、小皿二十、茶碗皿・猪口此内二十)」と記されており、これを伝世品と照合すると、鉢＝尺皿・大皿＝七寸皿・皿＝五寸皿・小皿＝三～四寸皿に当てはまります。

鍋島焼に描かれた文様は植物から器物まで多岐に渡りますが、人物や動物を描いた例はほとんど見られず、その種類には偏りがあります。理由として、献上品という性質上、将軍に対して失礼にあたらない文様でなければならない事、吉祥・慶祝の意味を持つ文様が好まれた事などがあげられます。中には年代を超えて繰り返し描かれた文様もあります。「染付 桜樹文 皿」(画像④)は同じ図案の色絵製品が九州陶磁文化館に収蔵されており、鍋島家伝来の図案帳にも描かれています。染付と色絵で技法は異なりますが、図案帳を元に同図案の製品が繰り返しつくられていた事がわかります。

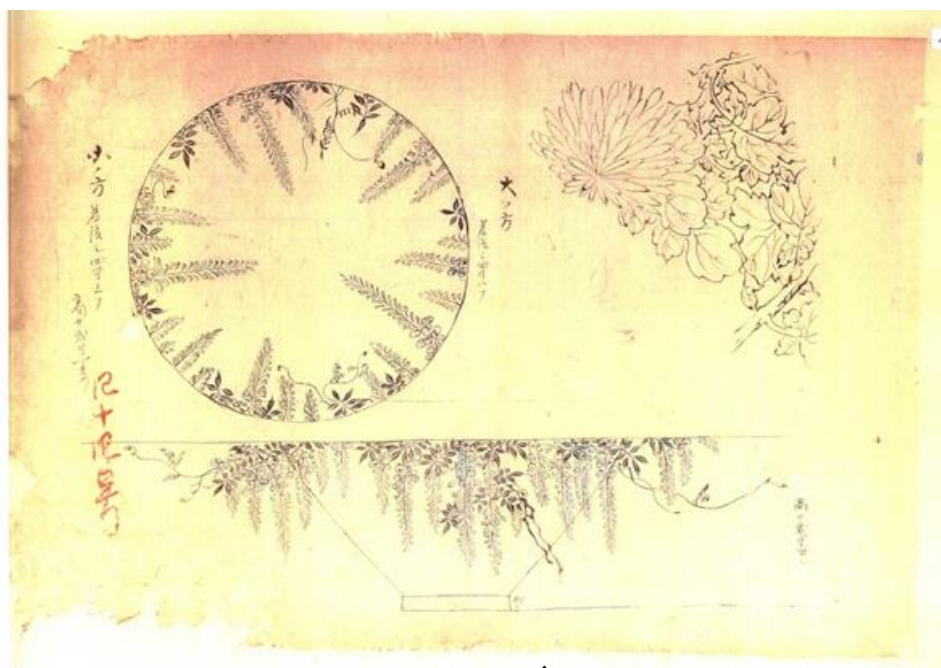
規格の整った精緻な造形・絵付けは、献上を目的とした鍋島焼の最大の特徴であり、鍋島藩窯の職人達の技術の高さを表しています。今展示では、鍋島焼に見られる規格性と、それを可能にした様々な技術についてもご紹介致します。

#### ◆鍋島家伝来・図案帳の役割

佐賀藩主鍋島家には、鍋島焼の意匠を記した図案帳が伝わっています。今展で紹介する図案帳は、綴本の形状ではなく各ページがバラバラで、描かれているのは文様意匠や図面など。それぞれ紙質や大きさが異なり、「元禄」「宝永」「正徳」「享保」といった異なる年代が記されたものがあるため、これらは同じ時代に描かれたのではなく長年に渡り描きためられたものと思われます。中には鍋島焼を製造する際の指示書、もしくは製品化した意匠を記録する目的で描かれたと思われる、伝世品と文様・形状が一致する図案もあります。

元禄6年(1693)鍋島藩主光茂から代官にあてた文書「手頭」では、「最近鍋島焼の作風がマンネリ化している、珍しい意匠があれば書き付けて差し出すように。」といった命令が下されました。図案帳の中にはやきものの図案や、「織物蝶圖」と記された蝶文のスケッチなどが描かれており、陶磁器・絵手本帖・染織品など文様意匠を幅広く取材した様子がうかがえます。図案のほとんどは類似する伝世品が未だ見つからず、実用的な指示書というより、藩の年寄や進物役へ提出するためのアイディアブックとして、鍋島焼の新たな意匠を描きためたものとも考えられます。

実態は未解明ですが、文様意匠のスケッチやアイディアがふんだんに描きこまれた図案帳は、職人たちが試行錯誤しながら鍋島焼の意匠を生み出した様子を垣間見る事のできる貴重な史料と言えるでしょう。関連する伝世品とあわせてご紹介致します。



↑

鉢を上方と側面からみた二面図。  
藤花の図案を描く。右上には菊文  
様のスケッチ。



上方には織物に取材したと思わ  
れる蝶文様。左の文様には「聚楽  
邸描金」と書き添えられている。  
下方には「東大寺什御倚懸紋」と  
記された装飾品に表わされる鳳  
凰文様のスケッチ。

↓



※なお、概要の要約が必要な場合は以下の文章をご参照ください。

■ 37 word

佐賀藩鍋島家が献上用に創出した鍋島焼の名品約 80 点と図案帳をあわせて展示。

■ 87 word

佐賀藩鍋島家が献上用に創出した磁器、鍋島焼。最盛期には大きさ・形・意匠などに様々な規定がありました。それを裏付ける鍋島家伝来の図案帳と共に、鍋島焼の名品約 80 点を展示します。

■ 152 word

佐賀藩鍋島家が献上用に創出した磁器、鍋島焼。最盛期には大きさ・形・意匠などに様々な規定があり、一定の規格性をもって製造されていたと考えられています。それを裏付けるように鍋島家には文様意匠や図面を描いた図案帳が伝来しています。精緻に整えられた規格性に注目し、図案帳と共に鍋島焼の名品約 80 点をご紹介します。



## 展示解説

展示期間中、第2週・第4週の水曜日と土曜日に、当館学芸員による展示解説を行います。予約は不要です。入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください。

■第2・第4水曜 午後2時～ (1月8・22日、2月12・26日、3月12・26日)

■第2・第4土曜 午前11時～ (1月11・25日、2月8・22日、3月8・22日)

※各回、約40分～50分ほどの解説になります。

※団体でご来館のお客様への展示解説も承っております。電話による事前予約制。

お気軽にご連絡くださいませ。(電話：03-3465-0070)



## 外国語展示解説 (中国語・英語)

展示期間中、当館学芸員による外国語の展示解説を行ないます。  
参加ご希望の方は事前にお申込み下さい。(電話：03-3465-0070)

■中国語 2月 9日(日) 午後2時～

■英語 3月 15日(土) 午後2時～

※ご希望により随時外国語ミュージアムツアーを承りますので、お問い合わせ下さい。



## 戸栗美術館 概要

戸栗美術館は、当館創設者・戸栗亨が長年に渡り蒐集しました陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987年11月に、旧鍋島藩屋敷跡にあたる渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里、鍋島などの肥前磁器および中国・朝鮮などの東洋陶磁が主体となっており、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



会場 : 戸栗美術館

開館時間 : 10:00~17:00 (入館受付は16:30まで)

休館日 : 月曜日 ※月祝の場合は開館、翌日休館のため、1月13日(月祝)は開館、翌14日(火)は休館。

入館料 : 一般1,000円/高大生700円/小中生400円(団体20名様以上で200円割引)  
※1月13日(月祝)成人の日は新成人無料観覧。受付にて年齢のわかるものをご提示ください。

交通 : 渋谷駅ハチ公口より徒歩15分/京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分  
※当館には駐車場・駐輪場はございません。

### ■2014年度の展示予定

4月12日(土)~6月29日(日)

『伊万里焼にみる一動物文様・植物文様展(仮)』

7月12日(土)~9月21日(日)

『伊万里焼にみる一水の表現展(仮)』

10月4日(土)~12月23日(火祝)

『古九谷・柿右衛門・鍋島展(仮)』

2015年1月6日(火)~3月22日(日)

『江戸の人々の暮らしのうつわ展(仮)』

※展覧会の会期は変更する場合があります。  
正式な日程は会期ごとにお送りするプレスリリースでご確認ください。



### ■展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人戸栗美術館

広報担当宛て

〒150-0046 東京都渋谷区松濤 1-11-3

TEL: 03-3465-0070 FAX: 03-3467-9813

URL: <http://www.toguri-museum.or.jp/>

E-mail: [kouhou@toguri-museum.or.jp](mailto:kouhou@toguri-museum.or.jp)





## アートサークルのご案内

陶磁器に親しみ、美術館をより楽しんでいただくために、会員制のアートサークルを設けております。1年間何回でもご入館いただける他、さまざまな特典もご用意しております。

年会費 ￥5,000（税込） ／ 発行から1年間有効
----------------------------

- 特典①** 入会から1年間、何回でもご入館いただけます。
  
- 特典②** ご入会時にミュージアムショップオリジナル商品をプレゼント。  
(一筆箋 or はがき5枚をお選びいただけます)
  
- 特典③** 企画展ごとに会報「戸栗美術館だより」、入場招待券2枚、展示ご案内チラシを送付いたします。
  
- 特典④** 展示ごとに陶磁器の専門家による特別展示解説にご参加いただけます。  
開催日時は会報でお知らせします。  
(所要時間約1時間、要予約・定員制・先着順)
  
- 特典⑤** 会員様を含めた3名以上の団体様は、学芸員による展示解説〈ミニツアー〉を受ける事ができます。(随時予約受付、所要時間約30分)
  
- 特典⑥** 各展示に1回月曜休館日に開催される特別講座にご参加いただけます。  
開催日時は会報でお知らせします。  
(参加費1500円、所要時間約3時間半、要予約・定員制・先着順)
  
- 特典⑦** ミュージアムグッズを価格の1割引きでご購入いただけます。  
(一部除外品あり)
  
- 特典⑧** 年末に当館オリジナルカレンダーをお送りいたします。
  
- 特典⑨** 有効期限内のご更新は、4,500円です。  
(期限を過ぎてのご更新は新規ご入会と同じく5,000円となります)。